

## 「陽成院親王二人歌合」の表現

顧 宇豪

### はじめに

「陽成院親王二人歌合」（以下「本歌合」という）は、成立時期が不明だが、拙稿の考察<sup>①</sup>によると、陽成院が主催し、二人の親王が左右の頭を務めた歌合である。「陽成院歌合（夏虫恋）」・「陽成院歌合（惜秋意）」・「陽成院一宮姫君歌合」と共に、陽成院関連歌合というグループに属する。その内容は、「寢覚めの恋」と「暁の別れ」という二つの歌題で、前後十番ずつに分かれ、計二十番四十首となっている。題材が色めいた恋歌だという点から、陽成院の親王である元良親王（八九〇―九四三）の女性との交渉を中心とする私家集、『元良親王集』との関連性が窺える。『平安朝歌合大成』（以下略称『大成』<sup>②</sup>）第一巻「四〇」に収録され、木船重昭氏の『元良親王集注釈』の付録「陽成院親王二人歌合纂修注釈」（以下略称『注釈』<sup>③</sup>）に注釈が存在する。

発表者のこれまでの考察により、「陽成院歌合（夏虫恋）」・「陽成院歌合（惜秋意）」は『古今和歌集』及びその周辺の歌を撰取していることが判明した。そうすると、本歌合もこのような特徴がある可能性が十分に考えられる。本稿では、本歌合における表現

撰取の痕跡を探しつつ、陽成院関係の歌合及び元良親王関係の和歌と共通する表現や、独自表現にも目を配り、本歌合の表現の特色を整理していく。その結果によって、他の陽成院関係歌合との関係を考量したい。

### 一 明白な撰取

本歌合は恋を主題としているため、先行の恋歌を意識しているであろうことは容易に想像がつく。まず「寢覚めの恋」の部には「夢」を詠む歌が多く見られる。『古今和歌集』の恋歌の部において「夢」を詠む歌は約三十首あり、特に巻十一の四八三番歌から五五一番歌までの詠み人知らずの歌がずらりと並ぶ部分に五一六・五二四・五二五・五二六・五二七番歌と集中している。この恋部に属する五四四番歌、

夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり  
は、「陽成院歌合（夏虫恋）」の冒頭、

1 いたづらに身離るてへど夏虫の思ひはえこそ離れざりけれ  
2 身を捨てて一つ思ひに焦がれたる心ぞ夏の虫にまされる

に撰取されたことが確認できるので、本歌合もまた同恋部の歌を撰取した可能性が十分に考えられる。また、「暁の別れ」で多く詠まれる後朝の恋は、普遍的な恋歌の主題なので、和歌の一般教養として先行歌を当然意識していたであろう。以上が本歌合の先行表現撰取の概況として推察されるところである。

さて、具体的な歌を見ると、明らかに特定の歌を撰取した例も見受けられる。まずそれらについて説明していく。

【七番歌】寢覚めつつ身を鶯の音をぞなく花さかりにし君を恋ふれば  
この歌について、『注釈』は、

ふと目をさましきましては、わが身をつらく思い、涙も乾かず、うぐいすのように声をあげて泣くことです。花盛りのような浮気なあなたを恋していますので。

と解釈している。注目したいのは、「花盛り」について「花盛りのような浮気」と捉えている点である。浮気者を呵責せず敢えて思いを寄せるのは違和感がある。そこで、

●古今和歌集・卷十五・恋歌五・七九八

よみ人しらず

我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば  
を見ると、詠み手が自分を鶯に喩えており、恋人の心が花のように散ったならば泣き悲しむだろうと詠んでいる。心が花のように散ることは、恋人が冷淡になったことを指している。それを踏まえれば、七番歌の「花盛りにし君」は、まだ情熱的だった頃に毎晩通ってきた男性恋人のことを言っているのであろう。そのような情熱的であった男が冷淡になって通って来ないから、寢覚めて

泣き悲しむことになるのである。加えて、自分を散る花のために鳴く鶯に喩えるという発想も両歌が共通しているので、七番歌は『古今和歌集』・七九八を撰取したと考えられる。

【八番歌】ことに出でてなにか言ふべき寢覚めつつ恋ふる下紐空にとくらむ  
この歌は、

●古今和歌集・卷十二・恋歌二・六〇七

とものり

事にいでていはぬばかりぞみなせ河したにかよひてこひしきものを

を撰取していると考ええる。八番歌の初・二句「ことに出でてなにか言ふべき」は、撰取歌の同句「事にいでていはぬばかりぞ」と酷似しており、同じく言葉に言い出さないことを言っている。そして、撰取歌の三・四・五句は、自分の恋心は水のない川の下に流れる伏流のように相手を恋慕していると言っており、即ち片思いの状態を詠んでいる。それは、八番歌の下句「恋ふる下紐空にとくらむ」という恋心を抱いている状態と似ていると言えよう。八番歌の第四句の「下紐」は、撰取歌の同句「したにかよひて」の「した」の字面をヒントに詠んだのかもしれない。

【九番歌】睡をし寝ば夢にも人を見るべきを夜な夜な覚むる目こそつらけれ

この歌は、廿卷本では欠落している。その撰取歌は、

●古今和歌集・卷十五・恋歌五・七六七

(よみ人しらず)

夢にだにあふ事かたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするる  
だと考えられる。まず、九番歌の初句の「睡をし寝」は、摂取歌  
には四句で見られる。そして、夢の中で恋人と逢えることも、九  
番歌と摂取歌が共に言っている。結果的に夢では逢えなかったが、  
その理由を摂取歌では自分が寝られないか恋人に忘れられたかと  
列挙している。九番歌では下の句で毎晩覚める目が辛いと言っ  
ており、『注釈』は「夜ごとにさめて、恋しい人を見させないこの目  
こそ、つれないよ」と、自分の目に当て付けて責めているように  
解釈している。しかし、摂取歌を踏まえれば、目が辛い理由は、  
恋心に焦がれて寝られないことによってもたらす生理的な苦痛が  
想定される。

【二八番歌】明けぬてふ声も涙ももろともにうち出づるからに袖ぞ  
濡れける

この歌は、

●古今和歌集・卷十三・恋歌三・六三九

寛平御時きさいの宮の歌合のうた としゆきの朝臣

あけぬとてかへる道にはききたれて雨も涙もふりそほちつつ  
を摂取したと考える。摂取歌の初句「あけぬとて」は、二八番歌  
の同句に見られ、同じく後朝の歌であることがわかる。また、摂  
取歌の下句「雨も涙もふりそほちつつ」は、別れに対して泣く  
ことの激しさを強調しており、二八番歌の二・三・四句の「声も涙

ももろともにうち出づる」という表現と通ずる。三八番歌、

おきてゆく方も知られず惑ふかな涙も袖も目にさはりつつ  
の四句の「涙も袖も」という表現も恐らく『古今和歌集』・六三九  
の同句の「雨も涙も」の変奏である。また、『古今和歌集』・  
六三九と同じく、三八番歌は末尾に余情表現「つつ」を用いてい  
るので、当該歌を摂取したと考える。

【三六番歌】限りとは思はぬものを暁の別れの床はおき憂かりけり  
この歌の下句の「床はおき憂かりけり・床をおき憂かるらむ」  
という表現は、

●古今和歌集・卷十二・恋歌二・五七五

(題しらず)

そせい法し

はかなくて夢にも人を見つる夜は朝のそこぞおきうかりける  
から摂取したと考える。摂取歌との相似度を考慮すれば、この歌  
に関しては十巻本の方が本来の形かもしれない。

以上は、特徴的な表現を手掛かりに、比較的簡単に摂取歌を特  
定した例である。簡単とは言うものの、本歌合の摂取は先行歌の  
字面に留まらず、二八番歌のように先行歌の内容を編み込む試み  
も見られるため、二つの陽成院歌合の摂取と比べて、より洗練さ  
れていると言える。

## 二 表現の再構築

前節に挙げた撰取の例は、一首を撰取する場合である。実は本歌合には複数の撰取歌から表現を撰取し、或いは常套的な表現を取り入れた上で、独自の表現にアレンジし、整合させる現象も見られる。それを「表現の再構築」と名付けて、解説していく。

【二番歌】くやくやと待ちて寢覚めにおきたれば月よりほかにいる人ぞなき

この歌の下句「月よりほかにいる人ぞなき・月よりほかにいる人もなし」は、時間の推移により傾く月の光が闇に入ってきたが、待っている恋人は訪ねてこなかったと言っている。つまり、「入る」は月が沈むこと、月の光が闇に入ること、恋人が闇に踏み入ることという三者を掛けている。訪ねて来る人がいないというニュアンスを表すのは、当時では一般的に、

●寛平御時后宮歌合・一三五

草も木も枯行く冬の宿なれば雪ならずしてとふ人ぞなき

●古今和歌集・秋歌上・二〇五

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

●同上・秋歌下・二八七

あきはきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなしとあるように、「とふ人なし」という表現が使われていたと考えられ、「惜秋意」にも、

6 訪ふ人もなきもの故にあちきなく言はむ間もなく惜しき秋かな

と、「とふ人なし」の表現が見られる。二番歌は恐らく、「とふ人なし」を念頭に置いて、月との関連から「入る人なし」という表現にアレンジしたと考える。

【二番歌】人恋ひて寝る春の夜はしきたへの枕なかれて浮きぬべきかな

この歌の十巻本の下句「枕流れて浮きぬべきかな」は、

●古今和歌集・卷十一・恋歌一・五二七

(読人しらず)

涙河枕ながるるうきねには夢もさだかに見えずぞありける

の二・三句を撰取したと考える。また、この『古今和歌集』五二七は、三七番歌、

37 涙川堰けどとまらず暁の別れは鶯の浮き寝をぞする

でも「涙川」と「浮き寝」の表現が撰取されていると考える。更に、三七番歌の二句「堰けどとまらず」は、

●寛平御時后宮歌合・一九二

人しれずしたにながるる涙川せきとどめなむかけは見ゆると

を撰取したと考えられる。即ち、三七番歌は「涙川」をキーワードに、『古今和歌集』五二七から「浮き寝」、「寛平御時后宮歌合」一九二から「せきとどむ」といった表現を撰取して、改めて組み合わせたのであろう。

【二番歌】寢覚めするわがしきたへは池なれや妻なき鶯となかれこそすれ

この歌では「しきたへ」と「流れ」の表現が見られるため、

一一番歌と同じく「浮き寝」を詠んでいると考えられる。ただし、一二番歌の浮き寝の主体は鴛になつてゐる。その鴛が浮き寝をするという発想は、恐らく、

●後撰和歌集・慶賀哀傷・一四〇〇・一四〇一

あひしりて侍りける女の身まかりにけるをこひ侍りける  
あひだに、よふけてをしのなき侍りければ 閑院左大臣  
ゆふさればねにゆくをしのひとりしてつまごひするこゑの  
かなしき

という藤原冬嗣が亡妻を偲ぶ歌から摂取したと考える。当該歌の二・三句「ねにゆくをしのひとりして」は、一二番歌が設けた一人寝に寝覚めする情景と関連付けられ、一二番歌の四句の「妻なき鴛」というのも、冬嗣歌の四句「つまごひする」及び妻を失つた冬嗣本人の状況と合致するのである。冬嗣歌は『後撰和歌集』に収録されているが、冬嗣の生没年月日（宝龜六年（七七五）―天長三年（八二六））を考えると、本歌合に摂取される可能性はある。また、一二番歌の三句「池なれや」は、鴛が池に棲むことに言及しており、その発想は、

●古今和歌集・卷十三・恋三・六七二

（よみ人しらず）

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれにけり  
で既に見られる。

なお、鴛を詠む歌は、本歌合において、全部で三首あり、一二番歌と前記の十巻本の三七番歌以外に、二二二番歌、

人知れずあかで別るる暁にうちなきそふる鴛の声かな

が見受けられ、末句の「鴛の声」という表現も、冬嗣歌の末句を意識したものだと考える。

このように、本歌合は先行歌から表現を摂取し、「鴛の浮き寝」という表現を新たに作つたのである。この「鴛の浮き寝」の表現は、後世にも影響を与えたようで、小西美来氏<sup>3</sup>によれば、『源氏物語』の朝顔の巻にある、

かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれに添ふる鴛鴦のうきねかは、本歌合から「鴛の浮き寝」及び二二二番歌の「なきそふる」を摂取したようである。従つて、本歌合は単に先行歌から表現を取り入れるだけでなく、新表現を作り出す役割も無視できず、それが世間に認められるほどの水準に達していたと言える。

### 三 陽成院グループの和歌と関連する表現

本歌合には、他の陽成院関係の歌合や元良親王の歌と共通する表現も見られる。

前記の二番歌、

くやくやと待ちて寝覚におきたれば月よりほかにいる人ぞなき  
の初句「くやくやと」は、『元良親王集』の冒頭歌でもある、

●後撰和歌集・卷九・恋一・五一〇・五一

あひしりて侍りける人のもとに、返事みむとてつかはしける

元良のみこ

くやくやとまつゆふぐれと今はとてかへる朝といづれまされりの同句に見られ、「来るか、来るか」と恋人が通ってくるのを待つことを言っている。この「くやくや」の表現は、和歌史においてほとんど用いられておらず、当該歌以外に、

●安法法師集・一〇

くる雁

くやくやとしたにまたるかりがねはおとづれつらしいまぞ  
なくなる

●教長集・四七一

旅宿虫

くやくやとわれをぞいもはくさまくらたれまつむしのこころ  
なくらむ

と後世の歌二首しか見られないので、元良親王と強く結び付けられる独創的な表現だと言える。

次に、二九番歌、

君を我おきてしゆけば朝露の消えかへりてもあはむとぞ思ふ

の下の句は「消えかへりてもあはむとぞ思ふ」とあり、恰も元良親王の代表作、

●後撰和歌集・卷十三・恋五・九六〇・九六一

事いできてのちに、京極御息所につかはしける

もとよしのみこ

わびぬれば今はたおなじなにはなる身をつくしてもあはんと  
ぞ思ふ

の同句「身をつくしてもあはんとぞ思ふ」と表現的にも意味的に

も酷似している。以上の二例を踏まえれば、元良親王の詠作が本歌合に含まれている可能性がある。

そして、陽成院歌合との関連を言えば、二七番歌、

春の夜のあかぬ別れの暁は千重の錦を裁つにざりける

では、暁の別れの惜しさと悲しさが錦を無駄にすることと類比されており、その錦を断ち切ることが惜しいという発想は、「陽成院歌合（惜秋意）」の二〇番歌、

紅葉葉を錦と見ゆる秋なればたつを惜しとや鹿の鳴くらむ

も、「紅葉に変色した葉が錦に見える秋なので、秋が旅立つと、錦を裁つことを惜しいと（思つて）、鹿が鳴いているのだろうか。」とあり、共通している。実は、この「錦を断つ」の表現は、先行歌に詠まれた例がなく、強いて言えば、

●古今和歌集・卷五・秋歌下・二九六

ただみね

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

と、秋が過ぎると紅葉が散り、山が錦を裁つて着物として着る気持ちになるという用例が見られるぐらいである。陽成院歌合（惜秋意）の二〇番歌は、その歌の「たちきる」を「断ち切る」として捉えて撰取したのであり、本歌合はその発想を受け継いだものと推測する。

#### 四 多用表現

本歌合において、「あかぬ」と「心ゆく」という二つの表現が多



用されている。

「あかぬ」、即ち満足できないという表現は、

22 人知れずあかで別るる暁にうちなきそふる鶯の声かな

27 春の夜のあかぬ別れの暁は千重の錦ぞ裁つにざりける

30 あさばらけあかぬ別れをわびつづら夕暮れをこそ慰めにすれ

32 明けぬとてあかずし君を別るれば心はゆかぬものにざりける

34 東雲に明けゆく道も惑はなむあかで別るる人のためには

40 嘆きつつ思ひにあかぬ暁は心もゆかぬ別れをぞする

と六首にも多用されており、全て「別れる」と組み合わせ、満足できずに別れる」という意味を表す。「あかぬ」という表現は「陽成院歌合（夏虫恋）」には、

12 またまたも身をぞ捨てつる夏虫のなほあきたらぬ恋を頼みてとあり、「陽成院歌合（惜秋意）」には、

16 儚くて過ぐる秋とは知りながら惜しむ心のなほあかぬかな

30 いづ方に心をやらむあかずして過ぎゆく秋を惜しみとどめで見られるので、陽成院グループが好んで詠む表現かもしれない。

なお、「あかぬ」は『古今和歌集』では十九首、『後撰和歌集』では十五首、『拾遺和歌集』では十九首が詠まれているので、当時では流行っていた表現と言える。

もう一つの「心ゆく」は、

4 思ひやる心しゆかばさよふけておきあて恋ふと告ぐべきものを

5 夢にだに見るべきものを寢覚めつつ恋ふる心はゆく方もなし

32 明けぬとてあかずし君を別るれば心はゆかぬものにざりける

40 嘆きつつ思ひにあかぬ暁は心もゆかぬ別れをぞする

と四首に詠まれており、ある方向に前進する意思と、心が晴れることを掛けている。その表現は、

#### ●興風集・四一

あへりとも心もゆかぬゆめぢをばはかなきものとむべもいひけりに夢に恋人と逢ったが実際に傍に行くことができず、心も晴れないと詠んでいる内容と近似しており、興風集・四一が摂取されたとも考えられる。

さらに、「あかぬ」と「心ゆく」の両方とも詠んだ歌は三二番歌と四〇番歌という二首が見受けられる。ここまでくると、さすがに重複しすぎると言わざるを得ない。恐らく、本歌合の詠者は「あかぬ」と「心ゆく」の詠み方について試行錯誤を繰り返していたと考えられ、そこから習作的歌合としての特性が窺える。

### 五 季節設定

本歌合において、「春」を直接に詠んだ歌は、

11 人恋ひて寝る春の夜はしきたへの枕なかれて浮きぬべきかな

16 夜半におきて恋ぞわびぬる春の夜は夢に見えつる人のなければ

20 恋ひてぬる春の寢覚にながめつつ人知れぬ音をなかな夜ぞなき

27 春の夜のあかぬ別れの暁は千重の錦を裁つにざりける

と四首あり、さらに二番歌では「呼子鳥」、七番歌では「鶯」を詠んでいるため、季節が春であり、情景が基本的に春の夜に設定されている。

一方で、前記のように、本歌合には「鴛」を詠む歌が見られる。鴛は冬鳥であるイメージが強く、『拾遺和歌集』には、

●拾遺和歌集・巻四・冬・二二六

(よみ人しらず)

夜をさむみねざめてきけばをしどりの浦山しくもみなるなるかな

●同上・巻四・冬・二二八

(よみ人しらず)

夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおくらん

●同上・巻四・冬・二二二

紀友則

とびかよふをしのはかぜのさむければ池の水ぞさえまさりけると、冬歌に詠まれている。また、『万葉集』には、

●万葉集・巻二十・四五三五・四五一一

属三目山齋「作歌三首

乎之能須牟 伎美我許乃之麻 家布美礼婆 安之婢乃波奈毛

左伎尔家流可母

をしのすむ きみがこのしま けふみれば あしびのはなもさきにけるかも

と、『二月於三式部大輔中臣清麿朝臣之宅「宴歌十首」という宴会歌の歌群に続く清麿邸の庭を詠む歌がある。当該歌は鴛の住む庭で春の花である馬酔木が咲いたことを気付いたと詠んでおり、鴛を冬の景物として捉えている。しかし、本歌合は、

12寝覚めするわがしきたへは池なれや妻なき鴛となかれこそすれ  
22人知れずあかで別るる暁にうちなきそふる鴛の声かな

37涙川堰けどとまらず暁の別れは鴛の浮き寝をぞする

と、『万葉集』から根付いた「鴛」の冬鳥としてのイメージを拘泥せずに詠んでいた。「惜秋意」では、

2をしと言ひて海へも誘へ飛び渡るいづれか秋の渡りなるらむと、鴛を秋と結び付いている。これらの歌を見れば、陽成院関係歌合における鴛の詠み方は当時の一般的な認識より自由だと言える。

なお、恋を春の夜と結び付けるのは、偶然ではない。『伊勢物語』第二段には、

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつという春の夜に思いに耽る情景を詠む歌が見られる。その他には、

●伊勢集・一一七

わすれはべりにし人を夢にみはべりて

はるのよのゆめにあふとしみえつるはおもひたえにし人をまつかな

●敦忠集・二〇

中将にてころばへはしらさず

はるのよのやみのなかにてなくかりはかへるみちにぞまどふべらなる

●貫之集・六四一

忘れず恋しきものは春のよの夢の残りをさむるなりけり

●同上・六五六

ねられぬをしひてねてみる春のよの夢の限りはこよひなりけり



と、当時の歌人が恋歌に「春の夜」を詠む作が見られ、それらの内容も「寢覚めの恋」と共通する所がある。つまり、春の夜に恋い侘びるという題材は、当時では一般的に詠まれていたとも考えられる。そうすると、本歌合の歌題は、春と恋の関連性を意識したものだと思われ。

## おわりに

本稿は、「陽成院親王二人歌合」の表現について、考察を試みたものとなる。考察結果から見れば、本歌合は「夏虫恋」「惜秋意」の特色を色濃く受け継いでおり、『古今和歌集』及びその周辺の歌を積極的に摂取するという姿勢は変わっていないが、独自の発想も芽生えつつ、摂取した表現の変奏や新しい表現の開拓に注ぐ努力も窺える。こうした努力はやがて陽成院グループの和歌が世間に評価されることに繋がるであろう。

## 付記

本稿において引用した和歌は、特に断らない場合は『新編国歌大観』古典ライブラリー版による。「陽成院親王二人歌合」の本文は『日本名筆全集 平安時代篇 第26巻』（書芸文化院、一九五八年）所収尊経閣蔵十巻本の複製本の影印を底本にし、「陽成院歌合

（夏虫恋）」の本文は久曾神昇『歌合巻 上』（古典文庫、一九五〇年）所収尊経閣蔵十巻本の翻刻を参考にし、「陽成院歌合（惜秋意）」の本文は肥前島原松平文庫本を底本にし、適宜漢字を当てて校訂したものである。各歌の歌番号は、便宜上、『新編国歌大観』の歌番号と一致させた。但し、「陽成院親王二人歌合」は、『新編国歌大観』において底本が十巻本であるため、十番の左歌が欠落し、総歌数が三十九首となっている。本研究はその一九番歌に当たる歌を廿巻本より補い、総歌数を四十番歌に整定した。

## 注

- (1) 「陽成院親王二人歌合」の成立事情再考…名称に対する疑問を手がかりに、『古代中世文学論考 第四十九集』、二〇二三年五月。五一―七二頁。
- (2) 萩谷朴『増補新訂 平安朝歌合大成 第一巻』（同朋舎出版、一九九五年）。
- (3) 木船重昭『元良親王集注釈』（大学堂書店、一九八四年）所収「陽成院親王二人歌合纂修注釈」。一九五―二二六頁。
- (4) 小西美来「『鴛鴦』考…『源氏物語』朝顔巻光源氏歌を中心に」、『解釈』65号、二〇一九年三月。二一―一〇頁。

(こゝろ) 広島大学大学院人間社会科学研究所博士課程後期在学

# **The Expression of Japanese Poetry Contest Held by Yozei, The Retired Emperor, in which His Two Princes Participated**

Yuhao GU

**Key Words:** literature of Heian Era, Japanese poetry contest, Yozei the Retired Emperor, earlier poetry, expression intake

Japanese poetry contest held by Yozei, the Retired Emperor, in which his two Princes participated, was held in early tenth century. This is the private poetry contests held by Yozei in which mainly his family and vassals participated. Like “Regrets about autumn,” the Japanese poetry contest held by Yozei, the Retired Emperor, expressions of poetry from the preceding period around *Kokin Wakashu* can also be seen in this, which was probably the requirement for this poetry contest. This study will explain these characteristics by examining the nature of this poetry contest.